

州志故墟考に云ふ。長享の頃賊帥石浦主水、加賀國石川郡石浦に住す。此の堡は今慈光院の地邊に在りしが、松田次郎左衛門が爲に、主水謀られ殺さるゝ時、石浦の堡も放火せらるゝ。又混見滴寫にも、松田次郎左衛門が甥は石浦主水というて慈光院の邊に居城をなしたり。といへり。本多家元家士竹村親愛曰く、石浦の舊社地の北方に霞池と稱し、今埋もれて沼の如く成りたる池あり。此の池昔は大いなる池にて、此の池の高なる地は即ち石浦の舊社地、所謂慈光院の敷地なり。今も少しく石垣など残れり。石浦砦は舊社地の地にて、右霞池をば要害となし、爰に砦を築き居たりし事知られたり。古老の傳説もありしかど、今は傳聞の事も絶えたり。といへり。

○石浦主水傳説

加邦錄に云ふ。石川郡田井の城主松田次郎左衛門、同郡米泉の須崎兵庫と和睦しけるに、次郎左衛門彼館へ招かれけり。松田が甥石浦主水と共に彼館へゆきけるに、酒宴數刻におよび、主従悉く泥酔して前後を知らず。石浦主水用所ありて、露地の間道へ出でたりけるに、藪中に伏兵數多居

たり。主水驚き、扱は敵の謀に落されたりと、堀を越え道を尋ねて石浦の砦へ逃歸りけり。次郎左衛門主従は泥酔して油斷しけるにより、遂に兵庫が爲に討たれけり。松田が馬捕なる三右衛門、只一人漸く逃出で、田井の本城へ歸り來り、主従悉く須崎に謀られたるよしを告げ知らせ、防戦を勵ますといへども、残り居る者纔に貳拾人に足らず。其上石浦の砦もはや攻落されしと見えて、餘煙天を掠めたり云々と。又混見滴寫には、石浦主水は餘り酒にも酔はざりけるが、露地へ出で、あなた此方の流れ水、庭の景色をも打めぐり見る内、とある藪陰に射手の者と覺しくて、兵士數人かくれ居たり。あはやとおもひ立歸り、伯父の次郎左衛門を起すといへ共、能く泥酔しけるにより、主水は堀を飛越え道を探ねて、やう／＼におのが石浦砦へ逃げかへりけり。松田はさすがの勇力強勢の剛將なりしかど、泥酔したりければやす／＼と討たれ、郎従・手の者共必死と働きけりといへども、多勢に無勢難叶悉く討死す。松田が馬捕三右衛門と云ふ者は、敵登人討取りて深手も負はざりしかば、主人松田次郎左衛門が乘馬に打乗りて、飛ぶが如く駈

け歸り、跡を見れば、須崎兵庫が多勢二手に成りて、旌旗天を掩ふが如く、時を移さず押寄せたり。三右衛門は石浦が方へ立寄り、しか／＼のよしを告げ知らせ、扱主人松田が居城へ立歸り、留守居の者へ主人のありさまを語り、早敵押寄せ来る間、何れも一戦の下知有つて、後詰をも待ち給ふべしと勇激すといへども、随分の者共は多分米泉にて討とられ、石浦もはや落城と見えて、煙火天を掠め、関の聲は耳もとに聞えぬ。はや家僕共も逃失せて取籠り居るもの僅に拾人許、なか／＼一方をも防ぐべきやうあらず。松田が妻子も詮方なく、此上は自害せんと奥へ入りて支度するを、三右衛門一先づ越中の方へ立退かせ、荒木に隠し置きたりと云々。平次按するに、石浦主水は石浦氏の氏族ならんか。尊卑分脈大系圖に、林六郎光明弟大桑三郎利光・二男石浦三郎光綱・其の子石浦藤次實光・其の子石浦六郎長光と見ゆ、三州志故墟考に、石浦三郎光綱・其の子藤次家光石浦庄を領す。一説には、石浦五郎爲輔・同藤次成言此に居館すと。高澤忠順の金澤事蹟必録には、石浦庄内に富樫家の一族石浦五郎爲輔・同藤次成言と云ふ人の居館有りし

由云ひ傳ふれども、其の地知りがたし。といへり。平次按するに、右の爲輔・成言は、大系圖には石浦五郎などありて、石浦氏とは異也。

○山本若狭守家藝傳

菅家累譜に云ふ。上州七日市藩元祖前田大和守利孝生母於古和方、加州石浦城主山本若狭守女也。奉仕于高德公・文祿三年生利孝君於金澤城。高德公薨後雜髮稱妙蓮尼。と。按するに、山本若狭は本願寺一揆賊魁の一人にて、天正四年八月賊將連名にて、本願寺刑部卿法眼への披露狀に山本若狭守家藝の名を載せたり。披露狀の全文は、卷一府城濫觴の條に出せり。

按するに、石浦砦は、そのさき石浦主水居りしかど、洲崎兵庫が爲に落城せしを、天正の頃に至りて山本若狭彼の堡跡を修造し、更に此の要害に據りて尾山本源寺の守護と成り、本願寺の下知に隨ひ、此の地邊を押領して一揆の首魁となり居しかど、天正八年閏三月柴田勝家・佐久間盛政加賀國へ討入り、尾山城以下所々の要害共を落却せしめ、賊魁共を悉く討取りける頃、石浦砦も落却して、山本若狭な